

第3回 Creative University Conference に参加

堀内みどり

標記会議が4月14日から16日にかけてブータン王立大学を会場にして開催され、15カ国からの参加者があった。テーマは「Creative Economy, Creative University and Creative Development: Ideas, Knowledges and Paths towards Sustainability, Happiness & Wellbeing (創造的経済、創造的の大学、創造的発展:持続可能性、幸福、安寧に向かう理念、知識、方途)」、ブータン王立大学、マールブルク大学フィリップス校、国際創造的の大学ネットワーク (ICUN)、国民総幸福量 (GNH) 学研究所 (ブータン) が共催した。

3人の基調講演のほか、3つのフォーラム、4つのワークショップに分かれて発表が行なわれた。堀内は、ワークショップ3で、「A Study of Wellbeing for Sustainable Developments: A Power to Imagine」と題して、ネパールの2つのNGOの活動の事例を紹介し、女子支援が地域コミュニティの生活向上とその地域の環境保全および持続可能な開発に有効であるという趣旨の発表を行なった。

ブータンは1年で最も観光客で賑わうというシーズンで、パロ空港は旅行会社の人々が観光客を迎えていた。13日はパロ空港からも見えるパロのゾン(密教寺院)で有名な仮面踊りが開催されるとあってツーリストバスや徒歩で寺院に向かう人々が多く見られた。



コンファレンス会場

14日は参加者が揃ったところで学内ツアーがあり、3班に分かれて会場となった伝統医学部と政府が主導している伝統医学に基づいた薬草茶や丸薬を生産している研究所を見学した。伝統医学部の最上階にはいわゆる薬師如来が安置され、礼拝場となっていた。毎日の勤行のほか、毎月8日には学部にも所属する教員と学生が参集しての勤行が行なわれるという。学生は1学年に8名ほどで、最終学年に行なわれるいくつかの試験に合格すると、各地域に派遣され、医師として勤務するという。近代医療の病院もあるが、地方では伝統医の需要は高く、また、ブータン政府もブータン国内の薬草などの調査・育成に意欲的だという。学内ツアー後は、開会式および基調講演1が行なわれ、その後、各部屋に分かれて発表。

14日および16日の懇親会は、学内の中庭に大きな薪に火をつけ行われた。あいにくの雨の中ではあったが、民族舞踊、民族音楽が披露され、最後は参加者も踊りの輪に加わった。



丸薬乾燥室

北海道でサンショウウオの繁殖環境調査を実施

佐藤孝則

北海道には、エゾサンショウウオとキタサンショウウオの2種の小型サンショウウオが分布する。前者は、環境省が定めた3回目の改訂版「両生類・爬虫類レッドリスト」(2012年)では、国内のサンショウウオで唯一「情報不足」に指定されている。絶滅の可能性はあるものの、判断するには情報が不足している、ということでこのような判断になった。一方後者は、同「レッドリスト」では「準絶滅危惧」に指定されている。両種とも、環境省は貴重な生物種として保護対象種になっている。

著者は、これら2種の繁殖環境の現況を明らかにするために、繁殖期間中の4月にそれぞれの生息地へ赴いた。以下に、概要を報告する。

(1) エゾサンショウウオ (4月18～20日)

この種は北海道固有種で道内に広く分布するが、今回は北海道が『レッドデータブック』の中で「石狩平野の地域個体群」として指定した野幌森林公園内の個体群の状況を調べた。

林道脇の繁殖地は自然な状況に保たれ、保全状態は比較的良好だった。ただ、これらの繁殖場所は、林道を散策する人たちの目に付きやすい場所であるため、散策者の増加やサンショウウオの知名度が高まるにつれ、卵が持ち去られたりするリスクもあり、今後は考慮すべき検討課題だといえる。

(2) キタサンショウウオ (4月25～28日)

この種は釧路市の天然記念物に指定されており、日本では釧路湿原と北方領土の国後島に分布する遺伝学的にも貴重なサンショウウオである。

今回は人間の生活環境に隣接する場所で繁殖する4カ所の個体群を、10数年ぶりに再調査した。その結果、繁殖環境がほとんど変わっていないように見える場所でも、繁殖が認められる場所とそうでない場所の二つに分かれた。その原因は明確ではなかったが、人間側にその理由を求めることは十分可能だと推察された。



キタサンショウウオの繁殖地(釧路湿原)

たとえば、低層湿原に接する資材置場でききた水溜りでは、少なくとも10数年間は生活排水や機械油等がほとんど流入しなかったような水域環境がある(写真)。そこでは、むしろ産卵数は増えている。

一方、同じ低層湿原でもヨシ原が広がる場所では、10数年の間に宅地造成が進み、ヨシ原に重機が入った場所では、産卵場所が消失していたのが観察された。明らかに、人為的影響による繁殖地の消失と考えることができた。

以上、今回の調査ではサンショウウオ2種の繁殖環境の現況を垣間みることができた。これらは、昨年、筆者らが上梓した『北海道のサンショウウオたち』で紹介した内容の一部を補完する結果ともなった。